

「神の家族」

マルコ3：20-35

平吹光太 23.11.19

本日は「神の家族」と題してみことばの解き明かしをさせていただきます。この地上での家族（一般的には、夫婦や親子・兄弟などの血縁関係、同じ家に住み生活する人々）についてではなく、神が与えてくださった新しい祝福の関係である「神の家族」について、みことばから共に教えられたい。はじめに、本日の聖書箇所はサンドイッチ（挟み込み）構造の書き方が使われていることを覚えてたい。これは二つの場面が同時進行していることを表す書き方。イエス様の身内の者たちが「イエスはおかしくなった」と心配し連れ戻しに出かけ、そのやりとり（20-21節と31-35節）が一場で、その節（場面）の間にイエス様と律法学者たちの議論（22-30節）の場面が挟まれている。そこで本日登場する主な三種類の人々をⅠ.イエス様の身内の者たち、Ⅱ.律法学者、Ⅲ.イエス様の周りでみことばに聞き入る人たちの順番で見えていく。

I. イエス様の身内の者たち

「さて、イエスは家に戻られた。すると群衆が再び集まって来たので、イエスと弟子たちは食事をする暇もなかった。これを聞いて、イエスの身内の者たちはイエスを連れ戻しに出かけた。人々が『イエスはおかしくなった』と言っていたからである。」（20-21）

これまで様々な活躍をなされたイエス様の元には群衆が常に押し寄せ、食事を取る暇もない程だった。本日の箇所が登場するイエス様の身内の者たちとは母と弟妹たちのこと。この時点で長男のイエス様には養父ヨセフと母マリヤの間に何人かの子どもが生まれ、弟妹たちがいた。ヨセフはイエス様が公生涯を始められる前にはこの世を去っていた。そのような中、母マリヤと弟妹たちは長男のイエスが30歳の時に突然いなくなり、しばらく帰ってこないと思っていると噂で“イエスがおかしくなった”と聞いた。食事をする暇もない程に宗教に没頭し過ぎていることを心配し、連れ戻して（強い言葉で「捕まえる、捕縛する、支配する」）、自分たちの思い通りの生活をしてほしいとイエス様を探した。まだこの時点で信仰を持っていない弟妹たちにとってはイエスの目立った行動で人様に迷惑や問題を起こして身内の自分たちにまで何か被害が及ばないように、穏やかな生活をしてほしい思いであった。

私たちも自分の子ども、兄弟、夫婦、家族、またその他の人間関係全てにおいても自分の思い通りにさせたいと言葉や態度で相手を支配してしまう弱い者。あたかも自分が絶対者で、相手は奴隷かのように。決して人を支配してはいけない。また支配されてもいけない。

「さて、イエスの母と兄弟たちがやって来て、外に立ち、人を送ってイエスと呼んだ。大勢の人がイエスを囲んで座っていた。彼らは『ご覧ください。あなたの母上と兄弟姉妹方が、あなたを捜して外に来ておられます』と言った。」（31-32）

イエス様の家族は丸一日かけてナザレの家からイエス様のいるカペナウムに来たのにも関わらず、直接会うのではなく人を使いイエス様を呼んだ。彼らが外に立ち人を送って呼ばせることの心理にはイエスを取り囲む人たちよりも自分たちはイエスと近い身内であるので自分たちに従わせる自分勝手な思いが見える。イエス様の家族は自分たちの常識に捉われてイエス様の大切な宣教の働きを理解していなかった。

II. 律法学者

「また、エルサレムから下って来た律法学者たちも、『彼はベルゼブルにつかれている』とか、『悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している』と言っていた。そこでイエスは彼らを呼び寄せて、たとえで語られた。『どうしてサタンがサタンを追い出せるのですか。もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません。もし家が内部で分裂したら、その家は立ち行きません。もし、サタンが自らに敵対して立ち、分裂したら、立ち行かずに滅んでしまいます。』

まず強い者を縛り上げなければ、だれも、強い者の家に入って、家財を略奪することはできません。縛り上げれば、その家を略奪できます。まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒瀆することを言っても、赦していただけます。しかし聖霊を冒瀆する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。』このように言われたのは、彼らが、『イエスは汚れた霊につかれている』と言っていたからである。」
(22-30)

ここはもう一つの場面、律法学者たちとイエス様のやりとり。彼らはイエス様のことを「彼はベルゼブルにつかれている」とか、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している」と言っていた。つまり悪霊のかしらのベルゼブル（サタン別名）がイエスに取り憑いているから、その権威で下級の悪霊ども

を追い出していると彼らは人々に言っていた。これに対してイエス様は例えを用いて真理を語られる。そ

れはサタン、悪霊どもの中にも秩序があり、上司のサタンと部下の悪霊たちは争ったりはしておらず、そしてわたし（イエス様）が悪霊どもを追い出すことができているのは悪霊どものかしらサタンを縛り上げているから。

28-29 節は、「聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されない」が強調され、誤解されやすい箇所。ここはイエス様が律法学者に対して語られた警告。彼らはイエス様を汚れた霊と罵った。それは、聖霊の働きかけを無視して拒み、自分の意志で神に背を向けて福音を受け取ろうしない無条件の救いを拒絶する態度。そのような態度では永遠に赦されない滅びに至るという警告。ここは彼らが自らの過ちに気がつくように警告をされたのであり、決して赦されない有罪判決をされたのではない。29 節だけが強調されて 28 節のイエス様が言われた「どんな罪も赦される」という福音を忘れてはいけない。過去、現在、未来、犯してきた、またこれから犯してしまうどんな罪も主イエス様の十字架の御業の故に赦しが与えられている。私たちは生きる上で様々なことがあるが何よりも永遠の滅びから永遠の命へと移されたことを喜び感謝する毎日でありたい。

Ⅲ. イエスの周りでみことばに聞き入る人たち

「大勢の人がイエスを囲んで座っていた。彼らは『ご覧ください。あなたの母上と兄弟姉妹方が、あなたを捜して外に来ておられます』と言った。すると、イエスは彼らに答えて『わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか』と言われた。そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。『ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。』」(32-35)

これまで見てきたイエス様の弟妹、律法学者たちはこの時点では神の家族とは呼べない者たち。ここで登場する3番目の人たちが「神の家族」と呼ばれる人たち。彼らはイエス様を真ん中に神のみことばに聞き入る人たち。多くの人たちがイエス様を囲んでいる中でイエス様の身内の者に遣わされた人がイエス様に「家族が外に来ておられます」と言った。イエス様はその呼びかけに応答して家族のところに行くのではなく、ご自身の周りでみことばに聞き入る人たちを見回して、この世の家族に勝る「神の家族」の関係を示された。それはイエス様を中心にする交わり。私たちには色々な交わりが与えられていますが、一つ一つの交わりにイエス様を真ん中において集まりたい。それが神の家族の交わり。

さらにイエス様は神のみこころを行う人が神の家族と言われた。「みこころ」とは、神の意志、思い、望みという意味。神の家族となるには神のみこころを行う者でなければならない。神のみこころを行うの「行う」という言葉を見ると、神や人のために良いことを行わなければならないと思う。しかしイエス様の周りにいた人たちは何をしていたか？彼らはイエス様の周りに座り、みことばに聞き入っていた。イエス様は彼らを見て何よりもまずみことばに静まり聞く者が神のみこころを行う者でわたしの家族であると言われた。私たちは神のみことばよりも自分の思いや

願いを第一にする弱い者。家庭、職場、学校、教会の人間関係においても自分が理想とするように考え、行動してほしいと相手に願い、押し付ける者。イエス様は、あなたの思いや願いではなく、わたしの思い、望みが成されるところに神の家族があると言われた。私たちはいつもイエス様を中心に歩み、みことばに聞き、兄弟姉妹と交わり、神の喜ばれる神の家族の交わりをさせて頂きたい。週の初めのこの日曜日にも神を礼拝し、イエス様を中心にみことばを聞くため、主に集められたこの集まりこそ神の家族。自分たちの想いや願いではなく、神のみこころを求める集まりこそイエス様の言われる神の家族。この神の家族の祝福は日曜日だけではなく毎日でありまた永遠の御国においても続く。この世にあっては喜びだけではなく苦難や試練はあるが、それにも勝る祝福が神の家族にはある。

私たちは自分の思い願いではなく神のみこころ（みことば）を自分の願いとし、共にイエス様を真ん中において集まり、神の家族の祝福にあずかせて頂きましょう。自分の家族の中にイエス様を信じていない者がいても、イエス様の弟妹たちが後に神の家族とされたように、私たちもその希望を持たせていただく。そのためにもまず私たちが神のみこころを行う神の家族であることで、主の恵みと愛の通りよき管とさせて頂き、主の愛が家庭に職場に学校の人たちに流され満たされることが大切。いつの日か共に主を礼拝し、神の家族としての交わりをする日が来ることを希望持って一歩一歩、歩ませて頂きましょう。